



絶望感尺度の構造に関する研究

谷, 冬彦

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 9(2):17-27

(Issue Date)

2002

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000469>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000469>



絶望感尺度の構造に関する研究

谷 冬彦*

A Study of the Structure of the Hopelessness Scale

Fuyuhiko TANI

問 題

Beck, Weissman, & Trexler (1974) は、絶望感を「自分自身の未来に関するネガティブな期待」と定義し、20項目からなる絶望感尺度 (Hopelessness Scale) を作成した。Beck et al. (1974) は、絶望感を抑うつの中核的要素の一つとしており、様々な精神病理とも関連するとしている。Beck et al. (1974) は、絶望感尺度と患者についての臨床的評価、Stuart Future Test, Beck抑うつ尺度 (BDI) などとの相関によって、妥当性を示している。この尺度は、その後、多くの研究に用いられ、それらの研究においても信頼性・妥当性が確認されている。

この尺度の日本語版は、当初、桜井・桜井 (1992) によって作成された。しかし、桜井・桜井 (1992) の尺度は、原文を十分に反映していないと考えられる項目がみられるとともに、信頼性の検討も α 係数を算出したのみで、再検査の手続きを行っていない。また、妥当性の検討も Zung (1965) の抑うつ尺度 (SDS) との相関のみであり、桜井・桜井 (1992) 自身、今後の課題として多方面からの検討の必要性を指摘している。つまり、桜井・桜井 (1992) の尺度は、信頼性・妥当性の検討が十分とはいえなかった。

そこで、谷 (1998) は、Beck et al. (1974) の絶望感尺度を原文に忠実に、かつ、日本語として意味が理解しやすいように留意して訳出し直し、新たに日本語版絶望感尺度を作成した。谷 (1998) の尺度は、桜井・桜井 (1992) の尺度よりも α 係数が高く、また再検査法によっても検討がなされており、再検査信頼性係数においても高い値を示していることから、高い信頼性が確認されている。また、妥当性についても、BDI, 特性不安尺度, PIL等との相関を検討し、Shek (1993) の中国語版絶望感尺度作成の研究結果と同様な結果を得ていることから、妥当性が確認されている。さらに、谷 (1998) の絶望感尺度は、古屋・塩田 (1998) のソーシャルサポートが絶望感に及ぼす効果に関する研究でも使用されており、古屋・塩田 (1998) の研究においては、.90という高い α 係数が報告されているとともに、絶望感尺度得点を観測変数として使用した共分散構造分析モデルでは、非常に高い適合度が報告されている。

なお、時を同じくして、Tanaka, Sakamoto, Ono, Fujihara, & Kitamura (1996, 1998) は、日本語版絶望感尺度を作成しており、日本語項目は、松井 (2001) に示されている。

*神戸大学発達科学部発達基礎論講座

(2001年10月31日 受付)
(2001年11月2日 受理)

さて、Beck et al. (1974)の研究以来、絶望感尺度の因子構造については様々な検討がなされているものの、それぞれの研究において、絶望感尺度の構造的性質については結果が一致していない。

Beck et al. (1974)は、Varimax回転を伴う主成分分析の結果、3因子を抽出し、その3因子はそれぞれ情緒的、動機的、認知的側面であるとし、第1因子「未来に対する感情」(Feelings About the Future)、第2因子「動機の欠如」(Loss of Motivation)、第3因子「未来への期待」(Future Expectations)という因子名をつけている。

また、Hill, Gallagher, Thompson, & Ishida (1988)も同様にVarimax回転を伴う主成分分析を行った結果、3因子を抽出し、第1因子「希望」(Hopefulness About Future)、第2因子「あきらめ」(Giving Up)、第3因子「予期」(Future Anticipation)と因子名をつけている。

これらの研究について、中国語版絶望感尺度を作成したShek (1993)は、次の3点の批判をしている。第1に下位尺度の信頼性が確認されていないこと、第2に因子構造の安定性が確認されていないことを指摘している。そして、第3に、Beck et al. (1974)が抽出した3側面である情緒的、動機的、認知的側面という概念的区分はあいまいであり、しかも各因子に含まれる項目の中には、それらの概念区分に対応しない項目が含まれていることを指摘しており、Beck et al. (1974)の因子分析結果に疑問を呈している。

そこで、Shek (1993)は、絶望感尺度について、Varimax回転を伴う主成分分析を行ったところ、第1因子「絶望感」(Hopelessness)、第2因子「未来の確実性」(Certainty About the Future)、第3因子「未来への期待」(Future Expectation)因子という3因子を抽出し、Beck et al. (1974)の因子分析結果と若干異なる結果を示した。この因子構造については、2群の被験者のデータについての因子構造が同様であり、安定性の面からも確認されている。

しかし、桜井・桜井(1992)は、絶望感尺度について、主因子法による因子分析を行ったところ、固有値が第1因子から第2因子で落ち込みが大きく、寄与率が第1因子において高いことから、scree testによれば単因子構造ととらえるのが適切であると指摘している。固有値や寄与率に関するこのような傾向は、Beck et al. (1974)やHill et al. (1988)、Shek (1993)などの研究における結果でも同様であり、桜井・桜井(1992)の指摘は示唆的である。

その一方で、Tanaka et al. (1998)は、絶望感尺度について、scree testと固有値1以上のカイザー基準の両方の観点から2因子を抽出し、Oblimin回転を伴う主成分分析を行ったところ、第1因子「希望に満ちた未来への疑い」(Doubt About a Hopeful Future)、第2因子「希望のない未来についての信念」(Belief About a Hopeless Future)と名づけている。

さらに、Steer, Kumar, & Beck (1993)は、Beck et al. (1974)の因子分析結果と類似した3因子を抽出しており、第1因子「拒否」(Rejection)、第2因子「受容」(Acceptance)、第3因子「断念」(Resignation)と名づけている。Steer et al. (1993)の研究結果において示唆的なのは、第1因子が逆転項目から主に構成され、第2因子が逆転項目でない項目から主に構成されていることを指摘していることである。

このように、絶望感尺度の因子構造については、研究者によって定まっていない。したがって、これらの議論を統合し、絶望感尺度の因子構造について明確な視点を提示する必要がある。

本研究においては、谷(1998)が作成した日本語版絶望感尺度の構造的性質を詳細に検討することによって、絶望感尺度の因子構造について明らかにすることを目的とする。

なお、谷(1998)の研究においては、絶望感尺度を一次的なものとして、信頼性・妥当性の検討を行ったが、絶望感尺度の構造的性質を確認した上で、改めて信頼性・妥当性についても検討を加える。

方 法

1. 調査対象

新潟県内の大学生422名（男177名，女245名）。平均年齢19.4歳（18～25歳）。

2. 測定尺度

(1) 絶望感尺度 (Hopelessness Scale)

Beck et al. (1974) の20項目からなる絶望感尺度を，谷 (1998) が日本語版として作成したもの。元尺度は2件法であるが，Shek (1993) や桜井・桜井 (1992) と同様に，回答範囲を広げ，「全くあてはまらない」，「どちらかというにあてはまらない」，「どちらかというにあてはまる」，「良くあてはまる」までの4段階評定 (0～3点) になっている。

(2) PIL (Purpose-in-Life Test)

Crumbaugh & Maholick (1964) が，Franklの理論に基づいて，人生の意味，目的意識を測定する尺度として考案したものの日本語版 (佐藤，1993)。20項目。7段階評定 (1～7点)。

(3) 特性不安尺度 (Trait Anxiety Inventory)

Spielberger, Gorsuch, & Lushene (1970) の尺度を，清水・今栄 (1981) が日本語版として作成したもの。20項目。4段階評定 (1～4点)。

(4) Beck抑うつ尺度 (Beck Depression Inventory ; BDI)

Beck (1967) の尺度を，大野 (1990) が邦訳したもの。抑うつ傾向を測定する尺度。21項目。4段階評定 (0～3点)。

3. 手続き

各尺度を講義時間に配布し，集団的に実施した。調査時期は，1995年1月であった。

結 果

1. 絶望感尺度の探索的因子分析

絶望感尺度の20項目について，Beck et al. (1974)，Hill et al. (1988)，Shek (1993)，Steer et al. (1993)，Tanaka et al. (1998) などの先行研究にしたがって，主成分分析を行った。固有値は，順に6.35，1.53，1.28，1.11，.95・・・であった。Beck et al. (1974) が用いている固有値1以上の基準 (カイザー基準) にしたがえば，4因子抽出も考えられるが，解釈可能性の観点および先行研究の多くが3因子を採用していることなどから，因子数を3として主成分分析を行い，Varimax回転を施した。Varimax回転後の分析結果をTable1に示す。なお，3因子の累積寄与率は，45.8%であった。

第1因子は項目2，7，9，11，12，14，16，17，20から構成される。これは，Beck et al. (1974) の第2因子である「動機の欠如」因子に含まれる項目 (項目2，3，9，11，12，16，17，20) の8項目中7項目，Hill et al. (1988) の第2因子「あきらめ」に含まれる項目 (項目2，8，9，11，16，17，20) の7項目中6項目，Shek (1993) の第1因子である「絶望感」因子に含まれる項目 (項目1，2，7，9，11，12，14，16，17，20) の10項目中9項目，Tanaka et al. (1998) の第2因子「希望のない未来についての信念」に含まれる項目 (2，7，9，10，11，16，19，20) の8項目中6項目が一致する。したがって，先行研究におけるそれらの因子とほぼ一致するものといえるであろう。この因子は，絶望感について率直に質問している項目から構成されているため，Shek (1993) 同様，「絶望感」因子とした。

第2因子は項目1，3，5，6，8，10，13，15，19から構成される。Beck et al. (1974) の第1因子である「未来に対する感情」因子の項目 (項目1，6，13，15，19)，および，Hill et al. (1988) の第1因子である「希望」因子の項目 (項目1，3，5，6，13，15，19) をすべて含み，Shek (1993) の第2

Table1 日本語版絶望感尺度の主成分分析結果 (Varimax回転後)

No.	項目	F1	F2	F3
第1因子 絶望感				
H17	将来、私が心から満足するようなことはありそうにない。	.75	.13	.05
H16	私が望むものは決して手に入れられないから、何かを望むことはばかげている。	.73	.18	.10
H20	望むものを得ようと思っても多分手に入れられないだろうから、懸命に努力しても仕方がない。	.70	.04	.00
H11	自分の将来を思うと、苦しみばかりで楽しいことは無さそうだ。	.64	.33	-.04
H14	何事にせよ私の望む通りにはならないだろう。	.61	.25	.30
H12	私が本当に欲しいものは手に入れられないと思う。	.60	.16	.28
H2	私は物事を自分の思い通りにできないので、あきらめたほうがしました。	.56	.17	.00
H7	私の未来は暗いように思われる。	.53	.48	.19
H9	私はいまだにチャンスが得られないし、これから先もチャンスに恵まれるとはとても思えない。	.49	.45	.01
第2因子 希望の欠如				
H6	*私がとても心配していることは、将来うまく解決すると思う。	.15	.65	.20
H19	*将来、悪いことより良いことの方が多くありそうだ。	.21	.64	.19
H8	*普通の人よりはましな人生が送れると思う。	.08	.62	.16
H5	*私が最もやりたいことを成し遂げるための時間は十分にある。	.01	.61	-.05
H1	*私は希望で胸をわくわくさせながら未来を待ち望んでいる。	.34	.52	.16
H15	*私は未来を強く信じている。	.33	.49	.30
H3	*物事がうまくいかなくても、それがいつまでも続くわけではないと思えば気が楽になる。	.22	.45	-.14
H13	*未来のことを考えると、今よりも幸せになっているだろうと思われる。	.30	.42	.29
H10	*私の過去の体験は、私の未来のためになるものだった。	.31	.35	-.16
第3因子 未来の不確実性				
H18	私にとって未来はいまいで不確かなものである。	.10	.09	.81
H4	10年後に私がどんな生活をしているか、予想できない。	.03	.09	.71
寄与率 (%)		31.7	7.6	6.4

注) *がついている項目は、逆転項目を示す。

因子である「未来の確実性」因子に含まれる項目(項目4, 5, 10, 15, 18, 19)の6項目中4項目を含み、Tanaka et al. (1998) の第1因子「希望に満ちた未来への疑い」に含まれる項目(項目1, 4, 5, 6, 8, 12, 13, 14, 15, 18)の10項目中6項目を含むものになっている。よって、この第2因子は、先行研究におけるそれらの因子とほぼ一致するものであろう。この因子は、すべて逆転項目から構成されており、未来へのポジティブな期待を否定する項目から構成されていることから、「希望の欠如」因子とした。

第3因子は項目4と18の2項目であり、Beck et al. (1974) の第3因子である「未来への期待」、Shek (1993) の第2因子である「未来の確実性」、Hill et al. (1988) の第3因子である「予期」、Tanaka et al. (1998) の第1因子である「希望に満ちた未来への疑い」などに含まれる項目の中の未来の不確実性を明確に表す2項目が分離したと考えられる。よって、この因子は「未来の不確実性」と名づけた。

したがって、本研究における分析結果は、Beck et al. (1974), Hill et al. (1988), Shek (1993), Tanaka et al. (1998) の結果と完全に一致するものではないが、非常に類似したものであった。また、本研究の結果は、Steer et al. (1993) が指摘したように、逆転項目かそうでないかによって因子が分かれるという傾向を明確に示したものとなった。

次に、各因子の下位尺度得点を算出し、その間の相関をTable2に示した。それによれば、第1因子下位尺度と第2因子下位尺度の間の相関は高いが、第3因子下位尺度と第1因子下位尺度・第2因子下位尺度の間の相関は、有意ではあるが低いものとなっている。

さらに、Tanaka et al. (1998) と同様に、主成分分析にOblimin回転を施し、3因子を抽出したところ、Table3に示すように、因子パターンはValimax回転による因子構造と全く同一であった。因子間

絶望感尺度の構造に関する研究

相関に着目すると、F1-F2で相関が高いものの、F1-F3, F2-F3の相関は低く、第3因子のみ性質が異なることが示唆される。

本研究の探索的因子分析結果によれば、第1因子が逆転項目を全く含んでいないのに対して、第2因子は逆転項目すべてから構成されている。したがって、第1・第2因子に分かれたのは逆転項目かそうでないかを反映したものである可能性が考えられる。つまり、本研究の分析結果からは、第1因子、第2因子は、実際に絶望感を感じているのか、希望に満ちた未来を否定しているのか、という微妙な差異を反映したものであり、両者は密接に関連しているが、第3因子の2項目のみが他の項目と異質であることを示すものであることが示唆される。

2. 信頼性の検討

全項目についての α 係数を算出したところ、.874であり、日本語版絶望感尺度の α 係数としては、桜井・桜井(1992)が報告している.83や、Tanaka et al.(1996)が報告している.86という値よりも高い値を示した。このことは本尺度の方が、より高い信頼性を有することを示唆するものである。

なお、探索的因子分析結果において異質性が示唆された項目4, 18を除いた α 係数を算出したところ、.880と若干値が上昇し、全20項目による全体尺度よりも、項目4, 18の2項目を除いた18項目の尺度(以後、HS-18と略す)が、より高い内的一貫性・一次元性を持っているといえよう。

また、因子分析結果から、3つの下位尺度ごとに α 係数を検討したところ、第1因子下位尺度では、.855、第2因子下位尺度では、.760、第3因子下位尺度では、.567であり、2項目だけである第3因子下位尺度を除けば、下位尺度ごとでも高い値を示した。

また、全被験者中の165名(男57名、女108名)について1週間の間隔をおいて、再検査法による信頼性係数を算出した。全体尺度では、.810、HS-18では、.802であり、ともに高い値を示した。また、第1因子下位尺度では、.739、第2因子下位尺度では、.752、第3因子下位尺度では、.670であり、下位尺度ごとでも十分な値を示した。

さらに、その165名の2時点で得られたデータについて、それぞれVarimax回転を伴う主成分分析を行ったところ、全く同一構造が得られ、先述した全被験者の因子分析結果と完全に対応する構造であった。因子負荷量の一致性係数を算出したところ、第1因子で.919、第2因子で.914、第3因子で.882とかなり高い値を示し、因子構造の安定性が確かめられた。また、それぞれの時点のデータにおける下位尺度得点間の相関を算出したところ、第1因子下位尺度と第2因子下位尺度の間の相関は高いが、第3因子下位尺度と第1因子下位尺度・第2因子下位尺度の間の相関は低いものとなっているという、先述した全被験者についての分析結果と同様であった(Table4, 5)。これらのことは、尺度の安定性を示すとともに、第1因子、第2因子に含まれる項目群が類似した性質を持ち、第3因子の「未来の不

Table2 下位尺度間の相関

	F1	F2
F2	.655***	
F3	.232***	.267***

***p < .001

Table3 絶望感尺度の主成分分析結果(Oblimin回転後)

項目	F1	F2	F3
第1因子 絶望感			
H17	.79	-.07	-.01
H20	.77	-.15	-.06
H16	.75	-.01	.03
H11	.62	.19	-.11
H12	.61	.00	.22
H14	.60	.10	.23
H2	.58	.03	-.05
H7	.45	.38	.11
H9	.42	.37	-.06
第2因子 希望の欠如			
H5	-.15	.67	-.10
H6	-.01	.66	.14
H8	-.07	.65	.10
H19	.05	.64	.12
H1	.23	.48	.10
H3	.13	.45	-.20
H15	.23	.43	.24
H13	.21	.36	.24
H10	.26	.30	-.21
第3因子 未来の不確実性			
H18	.06	.04	.80
H4	-.01	.06	.71

因子間相関

	F1	F2
F2	.470	
F3	.146	.152

確実性」を示す2項目だけが若干異質であるという全体構造を持っているという本研究の探索的因子分析結果の妥当性を、さらに支持するものであった。

これらのことから、谷(1998)の絶望感尺度は、構造的性質を考慮に入れても、高い信頼性を有することが確認された。

3. 平均値・標準偏差

20項目からなる絶望感尺度の平均値(標準偏差)は、22.6(8.0)であった。また、HS-18では、18.4(7.5)、第1因子下位尺度では、7.3(4.3)、第2因子下位尺度では、11.2(3.9)、第3因子下位尺度では、4.2(1.4)であった。

4. 妥当性の検討

絶望感尺度の全体尺度、HS-18、各下位尺度と、PIL、特性不安尺度、BDIとの相関をTable6に示す。絶望感尺度の全体尺度とPIL、特性不安尺度、BDIの相関が、Shek(1993)の結果とほぼ同様であることから、谷(1998)の結果と同様に、妥当性が支持された。また、絶望感尺度の全体尺度とHS-18では、他の変数との相関パターンがほぼ同一であり、HS-18の妥当性も示唆された。さらに、各下位尺度に着目すると、すべてにおいて0.1%水準で有意な相関がみられるが、第3因子下位尺度においては、第1、2因子下位尺度に比較し、PIL、特性不安尺度、BDIなどとの相関が低くなっており、このことから第3因子下位尺度だけは性質が異なるということが示唆されている。特に、第3因子下位尺度はBDIとの相関が低く、絶望感抑うつの中核的要素とするBeck et al.(1974)の仮定に反しており、構成概念的妥当性に欠けるものであるといえよう。

Table6 絶望感尺度とPIL、特性不安尺度、BDIとの相関

	絶望感尺度	HS-18	第1因子下位尺度	第2因子下位尺度	第3因子下位尺度
PIL	-.746***	-.729***	-.650***	-.677***	-.362***
特性不安尺度	.561***	.548***	.482***	.516***	.277***
BDI	.498***	.496***	.470***	.429***	.197***

***p < .001

5. 確認的因子分析による構造的検討

最後に、探索的因子分析結果をもとに、SEM(Structural Equation Modeling)による確認的因子分析を試み、絶望感尺度の構造的性質を検討する。

仮定したモデルは、次の5つのモデルである。

モデル1は、桜井・桜井(1992)の研究において指摘されているが、それ以外の従来の多くの研究においても、また本研究においても、固有値・寄与率が第1因子で高く、第2因子で急激に落ちていることから、全20項目について1因子構造を仮定するモデルである(全体尺度1因子モデル)。

モデル2は、本研究の結果から示唆されたように、本研究の探索的因子分析における第1因子・第2因子の項目群は、単に逆転項目かそうでないかという単なる反応バイアスによる違いであり、両者は一次元構造として1因子としてまとめ、本研究の探索的因子分析における第3因子である項目4、18

Table4 第1時点での下位尺度間の相関

	F1	F2
F2	.556***	
F3	.077	.012

***p < .001

Table5 第2時点での下位尺度間の相関

	F1	F2
F2	.579***	
F3	.154*	.158*

*p < .05 ***p < .001

絶望感尺度の構造に関する研究

のみ異質であり、もう一つの因子として、2因子にまとまるというものである（全体尺度2因子モデル）。なお、両因子間には相関を仮定する。

モデル3は、本研究の探索的因子分析結果に忠実に3因子を仮定し、各因子間には相関を仮定するモデルである（全体尺度3因子モデル）。

モデル4は、本研究において他項目とは異質であると示唆された項目4、18を除いたHS-18について、1因子構造を仮定するモデルである（HS-18 1因子モデル）。

モデル5は、HS-18について、本研究の探索的因子分析における第1因子・第2因子の2因子構造を仮定するモデルである（HS-18 2因子モデル）。

5つのモデルについて、検討した結果をTable7に示す。適合度指標は、GFI、AGFI、RMSEAを示してある。

Table7 絶望感尺度に関する確認的因子分析モデルの適合度指標

		GFI	AGFI	RMSEA
モデル1	全体尺度1因子モデル	.862	.829	.079
モデル2	全体尺度2因子モデル	.872	.841	.074
モデル3	全体尺度3因子モデル	.900	.875	.064
モデル4	HS-18 1因子モデル	.874	.840	.080
モデル5	HS-18 2因子モデル	.903	.877	.068

適合度指標によれば、モデル3かモデル5が、GFIにおいて、.90を上回っており、優れている。モデル5は、GFI、AGFIにおいては、モデル3よりも僅かに高いものの、RMSEAはモデル3の方が若干低くなっている。このことは、両モデルにおいて、観測変数の数が異なることにも起因しているだろう。したがって、この2つのモデルは甲乙つけがたく、両者を採用するべきと判断された。

モデル3の結果をFigure1、モデル5の結果をFigure2に示す。

なお、モデル2やモデル4よりも、モデル3やモデル5が優れているということから、本研究の探索的因子分析における第1・第2因子は、単なる反応バイアスによる差異というよりも、一応、構成概念的に区別した方が良いことが確認された。

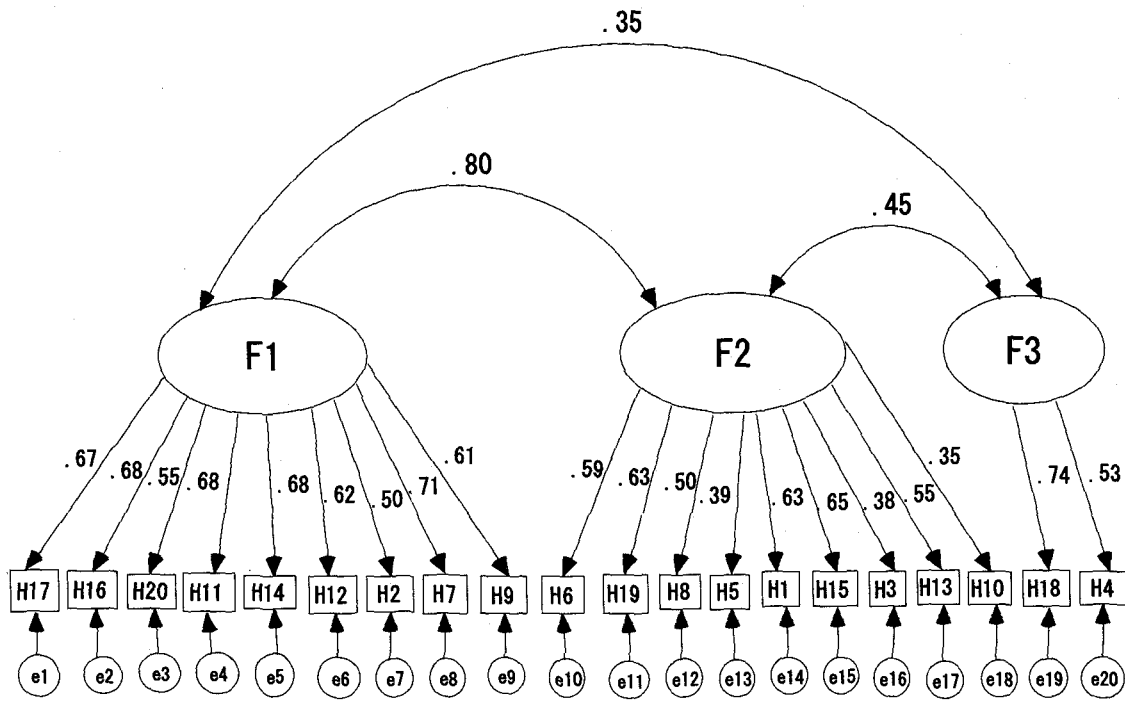


Figure1 確認的因子分析モデル3 (全体尺度3因子モデル)

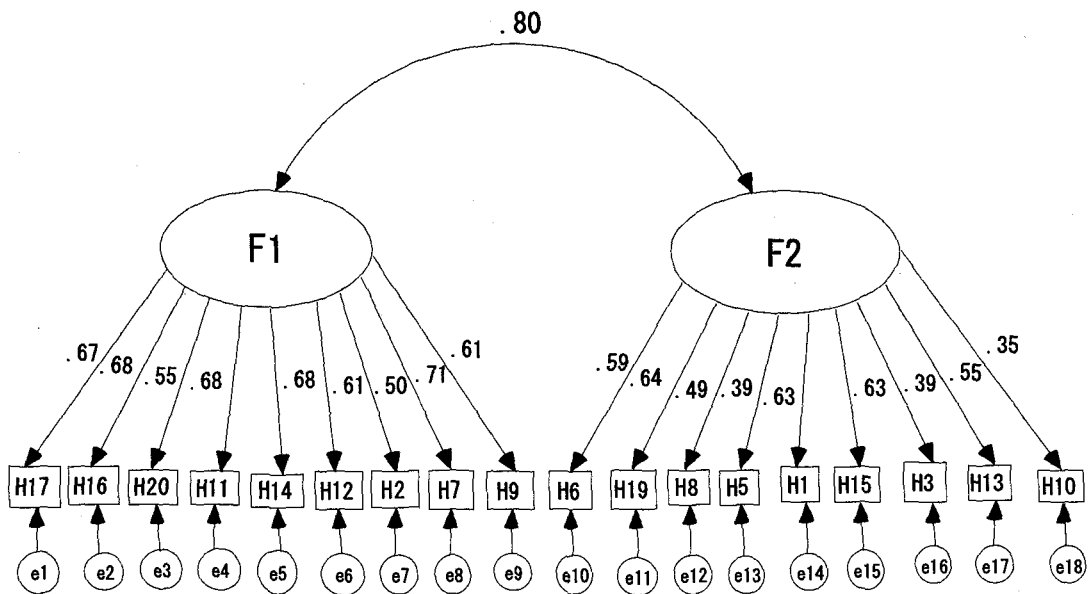


Figure2 確認的因子分析モデル5 (HS-18 2因子モデル)

考 察

以上のように、谷 (1998) の絶望感尺度について、様々な構造的検討がなされ、絶望感尺度の構造的性質について明らかになった。また、構造的性質を考慮した上での尺度の信頼性・妥当性についても確認された。

探索的因子分析結果からは、3因子が抽出された。第1因子は、逆転項目を全く含んでなく、絶望感について直接的に質問している項目から構成されているため、「絶望感」因子とされ、第2因子は、すべて逆転項目から構成されていることから、「希望の欠如」因子とされ、また、第3因子は、未来の不確実性について質問している2項目からなるため、「未来の不確実性」因子とされた。下位尺度間相関およびOblimin回転による主成分分析の因子間相関の結果から、第1因子と第2因子の相関が高く、第3因子は他の因子との相関が低いことが示され、第1・2因子は密接に関連しているものの、第3因子の2項目のみ異質であることが示唆された。ただし、第1・2因子は、逆転項目かそうでないかという分かれ方をしており、相関が高いことが示され、単なる反応バイアスであることも示唆された。

しかしながら、確認的因子分析結果によれば、探索的因子分析における第1因子と第2因子を一緒にして、1因子として仮定したモデル (モデル2, モデル4) よりも、両者を別因子としたモデル (モデル3, モデル5) の方が、適合度が高かった。このことから、両因子は、構成概念的にも、一応の区別をすることが適当であることが示唆された。Tanaka et al. (1998) は、経験された抑うつ的徴候の数と、本研究における「絶望感」因子にほぼ対応する「希望のない未来についての信念」因子の下位尺度得点との間には有意な相関があったが、本研究における「希望の欠如」因子にほぼ対応する「希望に満ちた未来への疑い」因子の下位尺度得点とは有意な相関がなかったことを報告している。このことは、絶望感を感じているということと、希望のある未来を否定することとは、意味的に差異があることを示唆する。絶望感を感じていたとしても、希望のある未来を完全に否定していることになるわけではないのかもしれない。

ただし、本研究における確認的因子分析によれば、F1とF2の間には、.80と非常に高い相関が認められる。また、谷 (1998) の研究では、絶望感尺度項目とともに、基本的信頼感尺度、時間的展望体験尺度などの項目を合わせて因子分析を行った結果、本研究における第1・2因子に含まれる項目はすべて同一因子 (「絶望-希望」因子) として抽出された。これらのことから、両者は、一応の区別はされるものの、構成概念としては非常に密接に関連しているものといえよう。

本研究の探索的因子分析における第3因子 (項目18, 4) は、下位尺度相関や因子間相関によって、第1・2因子とは異なる性質を持っていることが示された。さらに、第3因子下位尺度は、PIL、特性不安尺度、BDIなどとの相関も、第1・2因子下位尺度に比べて低く、特にBDIとの相関が低いことは、Beck et al. (1974) の理論とも矛盾するものであり、これらのことから異なる性質を持つことが示唆された。なお、谷 (1998) の研究結果でも、項目18, 4のみ、「現在・未来の確実性」因子に含まれ、他の絶望感尺度項目と異なることが示唆されている。本研究における確認的因子分析によるモデル3においては、因子間相関がF1-F3で、.35、F2-F3で、.45と、探索的因子分析結果における相関よりは高くなっており、他の因子と関連性があることは示唆されるものの、上述のような理由から、やはり項目18, 4の2項目は性質が異なると考えるのが妥当であろう。

桜井・桜井 (1992) は、絶望感尺度の因子分析結果における固有値・寄与率が、第1因子で高く、第2因子から急激な落ち込みがみられることから、scree test によれば単因子構造ととらえた方が適当であると指摘している。確かに固有値・寄与率におけるこのような傾向は、多くの先行研究同様、本研究でも確認された。また、本研究の結果では、全20項目の α 係数は、.874と高い。その意味では、尺度の一次元構造を考慮に入れても良いが、確認的因子分析による検討では、モデル1のような1因

子モデルは適合度が良くなかった。また、異質であると示唆された項目18, 4を除いたHS-18においては、 α 係数が.880と、全体尺度よりは内的整合性が若干上がったものの、モデル4のHS-18 1因子モデルにしても、適合度は相対的には良いとはいえなかった。したがって、本研究の結果からは、単純に絶望感尺度の一次元構造を仮定することは適切ではないといえよう。多くの先行研究が、因子分析を行い、多次元構造を示唆しながらも、結局のところ尺度としては一次元尺度として、20項目の合計点を求めて、検討を行っている。しかしながら、そこには大きな問題があるといえよう。

本研究では、様々な側面から絶望感尺度の構造的性質について検討することによって、従来の多くの研究結果を包括し、絶望感尺度に関するより妥当な構造を提示したといえるであろう。本研究における構造的検討によって得られた知見を踏まえるならば、今後のアセスメントやリサーチに使用する場合に注意すべきこととして、次のことが指摘できる。もしも一次元尺度として扱うならば、少なくとも20項目中の項目18, 4は異質であり、除外したHS-18の方が良いこと、また、HS-18を用いるにせよ、逆転項目の項目群とそうでない項目群は、別々に扱い、その性質の違いがないか確認すること、の2点である。

今後は、それらの知見を踏まえて、本研究における日本語版絶望感尺度を、臨床的な問題に応用した研究などが望まれる。

引用文献

- Beck, A.T. 1967 *Depression : Clinical, experimental and theoretical aspects*. New York : Harper & Row.
- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism : The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861-865.
- Crumbaugh, J.C., & Maholick, L.T. 1964 An experimental study in existentialism : The psychometric approach to Frankl's concept of noögenic neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, **20**, 200-207.
- 古屋 健・塩田晴美 1998 ソーシャルサポートが大学生の絶望感に及ぼす効果 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **47**, 579-598.
- Hill, R.D., Gallagher, D., Thompson, L.W., & Ishida, T. 1988 Hopelessness as a measure of suicidal intent in the depressed elderly. *Psychology and Aging*, **3**, 230-232.
- 松井 豊(編) 2001 心理測定尺度集Ⅲ サイエンス社
- 大野 裕 1990 「うつ」を生かす 星和書店
- 桜井茂男・桜井登世子 1992 大学生における絶望感および抑うつ傾向と原因帰属様式の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, **28**, 103-108.
- 佐藤文子 1993 PIL (Purpose-in-Life Test) 実存心理検査 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp.443-457.
- Shek, D.T.L. 1993 Measurement of pessimism in Chinese adolescents : The Chinese hopelessness scale. *Social Behavior and Personality*, **21**, 107-120.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STATE-Trait Anxiety Inventoryの日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, **29**, 62-67.
- Spielberger, C.D., Gorsuch, R.L., & Lushene, R.E. 1970 *Manual for State-Trait Anxiety Inventory (Self Evaluation Questionnaire)*. Palo Alto, California : Consulting Psychologists Press.
- Steer, R.A., Kumar, G., & Beck, A.T. 1993 Hopelessness in adolescent psychiatric inpatients. *Psychological Reports*, **72**, 559-564.
- Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T. 1996 Hopelessness in a community population in Japan. *Journal of Clinical Psychology*, **52**, 609-615.

絶望感尺度の構造に関する研究

- Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T. 1998 Hopelessness in a community population : Factorial structure and psychosocial correlates. *The Journal of Social Psychology*, **138**, 581-590.
- 谷 冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, **9**, 35-44.
- Zung, W.W.K. 1965 *A self-rating depression scale*. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

